



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2018.7) 平成29年度:12-16.

外来における血友病患児への自己注射指導

渋谷 富美子, 福田 尚子, 野村 理賀子, 平瀬 美恵子

外来における血友病患児への自己注射指導

旭川医大病院 外来ナースステーション

渋谷 富美子、福田 尚子、野村 理賀子、平瀬 美恵子

【はじめに】

血友病は遺伝子に関わる生まれつきの疾患で男子に多く、生涯にかけて症状のコントロールが余儀なくされる小児期における小児慢性特定疾患である。治療は凝固因子を含む製剤を投与することで欠乏している血液凝固因子を補充する定期補充療法が一般的であり、家庭内で自己注射を行うことが可能である。学童期から思春期までの時期をいかに問題なく日常生活を過ごせるかが重要である。

血友病患児に普及した家庭療法は患児・家族のQOLの改善に大きく寄与している。血友病患児にとって家庭注射・自己注射をいつ開始するか患児の症状や状況、家族の希望により異なる。家庭注射・自己注射指導は施設にもよるが、入院中に行うことが多い。

今回、C病院の小児科外来で血友病患児への自己注射指導を初めて体験した。自己注射指導手順も構築されていない状況で、指導に戸惑いながらも介入を行い、自己注射が実施できるようになった。外来看護師が血友病患児の自己注射指導に関わった経過を振り返り、今後の小児科外来での血友病患児・家族への看護の示唆を得ることにする。

【研究目的】

血友病患児への自己注射指導の関わりを振り返り、小児科外来での血友病患児・家族への看護を明確にする。

【研究方法】

1. 研究期間：2017年8月18日～9月30日
2. 研究対象
 - 1) D君 10歳代 血友病A(重症)
 - 2) D君の家族(両親・弟)
3. 研究の種類・デザイン：事例研究
4. 研究・調査方法：過去4年間にわたる患児への介入記録を振り返り、患児・家族の言動と看護師の関わりを研究者間で質的に分析し4期に分ける。
5. 倫理的配慮：患児の母親に、この研究における主旨を説明し口頭での内諾を受け、C病院

の倫理委員会の承認を得て研究を実施した。

【用語の定義】

家庭療法：血友病家庭注射療法のこと。凝固因子製剤を家庭などで医師の手を借りずに輸注すること。

家庭注射：病院以外の場所で、家族が注射をすること。

自己注射：患児(者)本人が自分で注射をすること。

【結果】

1. 対象の概要

弟が血友病と診断された際にD君も血液検査で診断された。3歳2か月から定期補充療法を開始し、母親が週3回家庭注射を右下肢穿刺で行っていた。D君が小学2年生の時に、父親の転勤で転居してきたためC病院を受診することになった。母親は小学5～6年生までにD君に自己注射をして欲しいと希望しており、D君は将来自己注射をすることは理解していた。

2. 1～4期の分析

1期（自己注射指導への準備から順調に指導へと導入できた時期）

小児科外来スタッフは、血友病患児への関わりをセミナー参加や自己学習で知識を深めていた。前医の看護依頼書から情報を共有し更に情報収集を行い、看護診断し意図的に介入していた。この時期の看護師は、患児・家族との関係を築く大事な時期と考えていた。診察時に同席し患児の反応や受け止めを確認し、自己注射の練習時には家族の参加も促していた。他施設の自己注射チェックリストを参考に、計画的に毎月の受診時に練習を行っていた。D君は自己注射の練習を楽しみに受診することや弟と一緒に参加することもあった。受診時の状況（やる気がなく、したくないと話す）から母親と相談し中止するなどD君や家族の意思を確認し慎重に介入していた。模擬手への穿刺の習得から、より実践に近い他者（父親または看護師）の血管で試み、D君は緊張しながらも積極的に行っていた。看護師は、D君の野球をやりたいという

目標を自己注射へのモチベーションに繋げていた。

2期（自己注射の練習ができずに指導が中断した時期）

看護師の血管での練習は上手に行え、その評価から次の練習は自分の血管での練習を促したが「自分に針を刺すのは痛みがあるのでできればしたくない。今日来るのが嫌だった」と拒否的な反応があった。自己注射への恐怖、抵抗感があることから、この段階では無理に進めずD君の意思を尊重して自己注射を止め、練習は継続できるように他者の血管で行うことを勧めた。その後、弟の入院や家庭の事情により受診をしていなかった。看護師はD君が自己注射の練習を中断したことを、自己注射することが嫌なのか、注射の練習が嫌なのかその思いを知りたいと考え、カンファレンスで意図的に関わることを話し合った。夏休みになりD君が受診した際に面談し、D君は「自己注射をやりたい気持ちはあるけど半分はやりたくないと思っている」と葛藤した気持ちを吐露した。母親からは自分に刺す練習は嫌だったみたいだと聞いた。看護師はD君が正直に心境を話してくれたことに対し、今まで練習でうまくできていたことを評価した。D君の気持ちを尊重して練習方法をD君と母親と相談し、模擬手や他者の血管での練習を継続することにした。看護師はこれらのD君が練習をしていない状況や面談した結果や方向性を主治医に伝えていた。

3期（自己注射の練習姿勢が変化したと捉えた時期）

看護師は慎重に関わることにして模擬手からの練習の指導を再開していた。突然、自己注射指導の経験のある主治医が練習に加わりD君の腕にマーキングし手を添え一緒に刺した。D君は「痛いから嫌だ」とためらっていたが、練習終了後には嬉しそうに「次も頑張る」と話していた。母親もその光景をみて喜んでいて。看護師はD君への自己注射指導がうまくいかなかったことで自信をなくしていたが、医師の自己注射指導の方法に後押しされ、再度D君に自身の腕を用いた練習を勧めた。また、母親から修学旅行までに自己注射を確立したいと希望があり、D君も同意していた。翌月から週2回放課後に来院し自己注射練習することをD君と家族と

共に計画した。D君は一変し自分の血管で練習をはじめたが、D君が刺すことをためらい嫌だなど消極的な表出があった際には、看護師は焦らず、急かさず、行動を見守っていた。このD君の行動の変化は自分で穿刺した痛みを体験したこと、目標期日が明確になったことから行う気持ちになったと思った。6回目の練習後、母親から自宅で自己注射実施の申し出があった。看護師も注射の手技が確実にできており、実施可能と判断した。

4期（自宅で右足から自己注射できた時期）

母親から冬休みに自宅でD君が自己注射を失敗し、その後は実施していなかったことを聞いた。D君からの表出はなかったが、看護師はD君に自己注射の失敗があったが、今までの頑張りを認め前進していることをほめていた。注射をしたくない気持ちになるのは仕方ないことだが、自信がつくまで練習は継続していくことを提案し、D君は同意し練習を行っていた。しかし、その後の自己注射練習は中断がちとなり、意欲が薄らいできたことを看護師は感じていた。目標であった修学旅行までに自己注射は確立できず、D君は毎回の受診にも来なくなっていた。母親からはD君がどうしても自己注射できるようになるのか看護師に相談があった。看護師もこの状況を悩み医師に相談していた。医師は母親に集中的に練習できるよう入院を勧めながら、自己注射獲得の方法として、①冬休みに入院して特別訓練、②今までどおり外来で練習、③訪問看護の導入のいずれかを選択するように説明していた。その後、母親から自宅で右足から自己注射できるようになった、と報告を受けた。

【考察】

小児科外来は、慢性的な療養を必要とする患児や家族への支援の場でもある。外来看護師は、患児が成長発達に応じて自分の病気について知識を持ち自らの力で主体的に生きていくことができるようにエンパワーメントを支援する必要がある。D君が自己注射練習に取り組んだ学童期は「学ぶこと」に大きな好奇心を持ち、勤勉性を獲得する時期でありD君には内的動機づけもあった。しかし、父親の転勤での環境・日常生活の変化などストレスフルな状況であった。さまざまな要因から、自己注射の練習を中断し受診せず、何かをきっかけに不登校になる

可能性もあったと思われる。自己注射の練習は、慎重に導入時期、患児・家族の意思、家族のサポートを確認して進める必要がある。D君が自己注射の練習をできた背景には、母親が家庭注射をしていたことや、D君が自己注射の必要性を理解していたことで、順調に導入できたと思われる。自己注射練習を中断し受診もしなかった時期は、家族と一緒に見守り、チームとして家族・看護師・医師とで話し合いD君にとって効果的なアプローチを行い自己注射へ誘導できた。看護師が、D君が自己注射を習得するという目標に向かって、家族と何度も話し合い信頼関係を築いたことや、家族の思いを受け止め支持したことは、家族のエンパワメントを支援する看護であったと思われる。慢性疾患のコントロールには受動的ではなく主体的であることが必要である。看護師は、D君の‘やる気’をどう引き出すのか悩み、またいつか自分の意思で再開できることを信じていた。D君が他者の支援を借りながらも自分で痛みを体感したこと、看護師がD君の気持ちを理解し思いに添いながら指導したこと、学童期でのライフイベントの時期が重なったことが行動意思を高め自己注射の確立ができたと思われる。血友病のセルフケアは自己注射だけではなくD君の人生にこれからも続く血友病患者としての自己形成、価値の中に自己注射が必要であるという認識を持ってほしい医療者の関わりが重要である。看護師はカンファレンスを通しD君・家族を自己注射指導だけではなく、疾患を持つ4年間の成長を見守りながら関わっていた。成長発達段階を捉えて介入していくことは、これからもD君が通院して疾患をコントロールしていくうえで必要なことである。

福地 1) は日頃の関わりの中でとらえた情報は、言語化されたり記録に残されたりしていないことも多い、カンファレンスをとおして意識的に児や家族のケア能力を言語化することで児・家族の状況を読みとりの共有につながっていると述べている。

外来においても患児の性格や状況を見極め、児を尊重し、関係性を構築して関わることは成長・発達段階にあるD君にとって自己注射を習得するには必要な4年間であったと思われる。

【結語】

1. 小児科外来でも血友病患児への自己注射指導は可能である。
2. 小児科外来の看護師は患児と家族のエンパ

ワメントを支援する必要がある。

3. 小児科外来では、患児・家族との関係性を構築しチームでアセスメントする必要がある。

【引用・参考文献】

- 1) 福地麻貴子：現任教育における「気づかい力」の育成、小児看護、39(4)、414-419、2016
- 2) 吉川喜美枝・小野織江編：小児における血友病看護、小児看護、32(12)、1552-1646、2009
- 3) 松本千明：医療・保険スタッフのための健康行動理論の基礎—生活習慣病を中心に、医歯薬出版、2002
- 4) 黒田裕子監修：看護診断のためのよくわかる中範囲理論、月刊ナーシング増刊号、27(12)、2007
- 5) 服部祥子：生涯人間発達論—人間への深い理解と愛情を育むために、医学書院、2000
- 6) 中野綾美編：ナーシング・グラフィカ小児看護学①小児の発達と看護、メディカ出版、2006
- 7) 鈴木和子・渡辺裕子：家族看護学—理論と実践、日本看護協会出版会、1995
- 8) 野嶋佐由美：家族エンパワメントをもたらす看護実践、へるす出版、2005

外来における血友病患児への 自己注射指導

旭川医科大学病院外来ナースステーション

渋谷 富美子 福田 尚子 野村 理賀子 平瀬 美恵子

【事例紹介】

患児 D君 10歳代 男性 病名 血友病A

家族構成 両親、弟、4人家族

病気に対する受け止め:「血が止まりにくいので血が出たり足が痛くなったりするので元気で遊べるように注射をしている」と話している。

治療 200X年(3歳2か月)

定期補充療法開始する(週2回)

前医からの情報でアドベイトを週3回で母親が朝登校前に家庭内注射(右下肢穿刺)を行っている。

【はじめに】

C病院の小児科外来で血友病患児への自己注射指導を行った。

自己注射指導手順も構築されていない状況で戸惑う看護師たちがいた。

今回、外来看護師が血友病患児の自己注射指導に関わった経過を振り返り、今後の小児科外来での血友病患児・家族への看護の示唆を得る。

【結 果】

1. 自己注射指導への準備から 順調に指導へと導入できた時期

看護師は前医からの情報を共有しD君・家族と関係性を築く大事な時期と考え、診察時同席し、自己注射練習に家族の参加を促した。毎月受診時に練習を行い、模擬手から他者の血管の穿刺へと順調に指導を進めていた。D君は野球をしたいという目標を持ち、積極的に練習した。D君や家族の意思を確認し慎重に介入していた。

【研究方法】

(1) 研究の種類・デザイン 事例研究

(2) 研究・調査方法 対象患児について電子カルテから以下の調査をおこなう。

事例の患児情報(年齢、性別、治療経過)、過去4年間にわたる患児家族への看護師の関わりを振り返り4期にわけ質的に分析する。

(3) 研究期間 2017年1月～2017年7月30日

(4) 倫理的配慮

患児の母親に、この研究における主旨を説明し口頭で内諾を受け、当病院の倫理委員会へ申請中

2. 自己注射の練習ができずに 指導が中断した時期

看護師は、D君の注射手技の評価から自分の血管での練習を促したが、自己注射への恐怖・抵抗感がみられ、D君の意思を尊重し、他者の血管での練習を継続した。その後家庭の事情等により指導が中断した。看護師はD君の思いを知るため面談し、D君は葛藤した気持ちを吐露した。主治医には指導の状況や面談の結果を伝えていた。

3. 自己注射の練習姿勢が 変化したと捉えた時期

看護師は慎重に関わることにして指導を再開した。主治医が練習に加わり手を添え、D君は自分の腕に初めて穿刺した。D君・母親より練習強化の希望があり、看護師は母親と相談し週2回の指導を計画した。D君は自分の左腕と右足の血管で練習を始め6回目の練習後、母親から自宅で注射をしてみたいと表出があり、看護師は注射手技は確実に出来ており、自己注射は可能と判断した。

【考察 2】

血友病のセルフケアは家庭内輸注だけではなくD君の人生にこれからも続く血友病患者としての自己形成、価値の中に自己注射が必要であるという認識を持ってほしい医療者の関わりが重要である。

外来看護師は、患児が成長発達に応じて自分の病気について知識を持ち自らの力で主体的に生きていくことができるエンパワメントを支援する必要がある。

4. 自宅で右足から 自己注射できた時期

D君は自宅での自己注射を失敗し中断していた。看護師はD君の頑張りを認め、自信がつくまで練習を継続することにしたが、再び指導は中断した。D君の意欲が低下していると感じていた母親から看護師に相談があり、看護師もこの状況を悩み医師に相談していた。医師からD君に中学生までに自己注射が出来るように話があり、その後D君は自宅で右足から自己注射出来るようになった。

【結語】

1. 小児科外来でも血友病患児への自己注射指導は可能である。
2. 小児科外来では患児・家族との関係性を構築しチームでアセスメントする必要がある。
3. 小児科外来の看護師は患児と家族のエンパワメントを支援する必要がある。

【考察 1】

自己注射の練習は、慎重に導入時期、患児・家族の意思、家族のサポートを確認しすすめる必要があり、D君もこれらの目標が一致していた。

自己注射の練習を中断し受診もしていなかった時期は家族と一緒に見守りチームとして家族・医師と話し合いD君にとって効果的なアプローチを行い自己注射へ誘導できた。

外来で患児の性格や関係性をとおして関わることは、成長・発達段階にあるD君にとって自己注射を習得するには必要な4年間であったと思われる。